

平成23年2月

谷村千華 学位論文審査要旨

主 査 池 田 匡
副主査 平 松 喜美子
同 成 瀬 一 郎

主論文

Difficulties in the daily life of patients with osteoarthritis of the knee: scale development and descriptive study

(変形性膝関節症患者の生活上の困難：尺度開発および記述的研究)

(著者：谷村千華、森本美智子、平松喜美子、萩野浩)

平成23年 Journal of Clinical Nursing 掲載予定

学 位 論 文 要 旨

Difficulties in the daily life of patients with osteoarthritis of the knee: scale development and descriptive study

(変形性膝関節症患者の生活上の困難：尺度開発および記述的研究)

変形性膝関節症（膝OA）は退行性疾患であり、わが国では高齢化率の上昇に伴い膝OA患者は増加の一途をたどっている。膝OAによる機能障害は「生活上の困難」をもたらすことが予測されるが、日本の社会文化的背景を反映した膝OA患者の生活上の困難を測定するよい尺度はなく、患者がどのような生活上の困難を抱えているのか、また生活上の困難に影響を及ぼす要因は何か、などについては十分に明らかでない。本研究では、膝OA患者の生活上の困難を測定する尺度の開発を試み、その信頼性・妥当性について検討するとともに、膝OA患者における生活上の困難の実態を明らかにした。

方 法

内容・表面妥当性を確認し、合計51項目の「膝OA患者生活上の困難尺度（DDLKOS）」原案を作成した。質問項目に対する回答は5段階で、生活上の困難を強く感じている者が高得点となるようにした。

調査期間は2009年4月から9月で、痛みや関節可動域制限などがある50歳以上の一次性膝OA患者650名を対象とした。調査項目は、DDLKOS、Life Satisfaction Index K（LSIK）、機能障害（痛み、関節可動域制限、筋力低下）、年齢、性別、社会的特性（職業、サポート人数、家族構成）、身体的・医学的要因（併存疾患の有無、BMI、膝OAの部位、罹患期間、困っている症状）とした。調査は自記式質問紙により実施し、郵送・回収した。

尺度開発の分析には、項目分析、探索的・確証的因子分析を行い、実態調査には記述統計、重回帰分析を用いた。

結 果

本調査の回収調査票数は500名（回収率76.9%）で、有効回答数362名（72.4%）を分析対象とし、対象者の年齢は、 72.4 ± 9.6 歳（50～95歳）、男性81名、女性281名であった。

探索的因子分析および確証的因子分析を行った結果、最終的に14項目3因子モデルとなった。因子名は「第Ⅰ因子：人生・生活における辛苦」、「第Ⅱ因子：生活動作時の難儀さ」、

「第Ⅲ因子：将来の生活に対する危惧」と命名した。適合度指標として、goodness-of-fit index (GFI) は0.911、adjusted GFIは0.874、comparative fit index は0.954、root-mean-square error of approximation は0.078が得られ、ほぼ統計学許容水準を満たし、モデル各部のパス係数は統計学的に有意であることが確認された ($p < 0.01$)。尺度の信頼性を示すCronbach's α 係数は、尺度全体が0.943、第Ⅰ因子が0.890、第Ⅱ因子が0.896、第Ⅲ因子が0.864であった。基準関連妥当性について、DDLKOSはLSIKおよび機能障害と低度～中程度の相関がみられた ($p < 0.01$)。

DDLKOSのなかで「かなり思う」、「非常に思う」を回答した者の割合で最も多かった項目は、「正座が難しいことに困る」が66.8%、次いで「将来、今よりも膝が悪くなるのではないかと心配している」が53.0%であった。重回帰分析の結果、痛み、筋力低下、下肢のバランスの悪さを感じている者、こわばりや膝の腫脹を感じている者ほど生活上の困難を感じている傾向を示した。

考 察

信頼性ではDDLKOSの内的整合性が支持され、妥当性ではその基準関連妥当性が確認された。確証的因子分析では、モデルの適合度が確認され、DDLKOSは一定の信頼性と妥当性を備えた尺度であると考えられた。

因子構造として、「人生・生活における辛苦」、「生活動作時の難儀さ」、「将来の生活に対する危惧」の3つが抽出された。関節症患者を対象とする既存の特異的なQOL尺度は機能障害や活動制限の側面が反映されている。本研究では心理社会的な困難が強調された新しい因子を備え持つ尺度が開発された。DDLKOSは14項目の質問で構成され、高齢である患者にとって簡便で活用しやすく、評価のツールとして活用されることが期待される。

膝OA患者の生活上の困難の特徴として、正座やしゃがみ込みなどの生活動作時の困難、将来の生活や病状に対する危惧が顕著にみられた。さらに、痛み、筋力低下、下肢のバランスの悪さを感じている者、こわばりや膝の腫脹を感じている者ほど生活上の困難を強く感じていることが明らかになった。医療者の役割として、膝OA患者が感じている生活上の困難を受け止め、共感的姿勢を持つこと、症状マネジメントの方略、生活動作時の工夫などの適切な情報および対処方法を提供していくことの重要性が示された。

結 論

DDLKOSの信頼性・妥当性が確認され、その有効性が示された。DDLKOSは日本人の文化・社会的背景に基づく心理社会的困難を反映する尺度として適切であった。